英語の変容とアメリカ英語およびその他の地域の英語

English Varieties and American English

松倉信幸＊
Nobuyuki MATSUKURA

Abstract

The new cultural environments for the use of English have caused considerable changes: the advent of loan words and new expressions, changes of meanings, and so on. Languages are always changing their forms such pronunciations, words, and structures. These variations are to a large extent independent from the other ones because the use of English is individually affected by interference from the speakers' mother tongues. We also should take into account regional varieties because each variation is connected with the educational and cultural backgrounds of the speakers. For example, we associate baseball and basketball with American English. On the other hand, people in India and Malaysia usually learn British English. Finally we must remember that the more English becomes a dominant global language, the more endangered languages will disappear from the earth.

Keywords: English Varieties, American English, British English

１．はじめに

言語は発音、語彙、そして文法において、常に変化が生じる。この言語の変化によって生じたものを変種(Varieties)という。大英帝国が世界の覇権を握ったころより、イギリス英語によって英語圏が拡大すると共に、英語の変種(English Varieties)を数多く誕生させるに至った。また、ヨーロッパの言語からだけではなく、大英帝国の植民地の言語からも、英語は多くの借用語を増大させた。英語が世界語あるいは国際語(International Language or World Language)と呼ばれる所以はこれらの点からである。

今日では 20 世紀におけるアメリカ経済発展の影響によるところも大きいが、国際社会において、英語はイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ共和国、インド、パキスタン、マレーシア、シンガポール、フィリピンそしてカリブ海諸国の第１言語あるいは公用語等で用いられており、加えて第２言語の世界における使用者の人口、およびインターネット情報のやり取りに用いる英語の圧倒的な優位性によって、世界の英語としての様相を呈している。本稿ではイギリスを発端にアメリカ、そしてこれら以

＊本学教授　　英語学(English Linguistics)

外の地域にも拡大し、変容していった英語について、具体的な言語事実を取り上げ考察を行う。

２．後期近代英語と大英帝国の繁栄

1700 年から 1900 年までが後期近代英語の時期で、それ以前の初期近代英語とを区別する。ブリテン島の小さな島国イギリスは 17 世紀に植民地支配が始まり、19 世紀後半までに世界の覇権を握る大英帝国を打ち立てた。この 200 年間をローマ帝国の黄金期パックス・ロマーナにならいパックス・ブリタニカ（イギリスの平和）と呼んだ。最盛期には文字通り、世界の７つの海を制して、アフリカではエジプトから南アフリカ、アジアではインド、マレーシア、および現在のミャンマー、北米ではカナダ、南半球ではオーストラリアとニュージーランド、そして太平洋や大西洋の島々を統治し、世界中に植民地を持つ日の沈まない帝国を築いた。この時代に君臨したのがビクトリア女王であり、大英帝国の繁栄とはすなわちビクトリア女王が在位した 1837 年から 1901 年までの期間といっても過言ではない。

イングランドでは 15 世紀の後半に導入された印刷術が、ロンドンで用いられていた英語を広く普及させたばかりか、つづり字や文体をも定着させたり、文体の統一を図る上で貢献した。また正しいつづりや正書法がほぼ今日の形式に落ち着いたが、正しい英語の手本となる書物が現れた。それがジョンソン(Samuel Johnson)とラウス(Robert Lowth)の書である。８年の歳月を費やしてジョンソンは 1755 年に *A Dictionary of the English Language* を出版した。彼の独断と偏見とも思われることばの定義がことばの面白さを伝え共感を与えた。その有名な記述が oat（カラス麦）の定義である。

A grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people.
（イングランドではふだん馬に与えるが、スコットランドでは人を養う糧である。）

この英文にはイギリス人のユーモアが込められていると言えよう。次に 1762 年にラウスは *A Short Introduction to English Grammar* を出版した。彼は正しい英語を追求する規範文法の立場を取る文法家で、現在非標準の二重否定は間違った用法であると指摘した。その後、マレー(Lindley Murray)が 1795 年に *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners: with an Appendix* を出版した。この文法書はラテン語文法の影響を基にして書かれたものであるが、英語の９品詞（名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、前置詞、代名詞、冠詞、間投詞）が取り上げられ、現代まで影響を及ぼし、今日の学校文法や伝統文法の規則は多くの点でマレーに由来する。

３．イギリス英語

３．１．標準イギリス英語

標準イギリス英語の代表は Received Pronunciation（容認発音）と呼ばれ、略して RP と言う。イギリスは４つの地域から成立しているため、標準イギリス英語には RP に加えて、スコットランド英語、ウェールズ英語、北アイルランド英語がある。RP はロンドンを中心としたイングランド南部で、パブリックスクールおよび大学程度の教育を受けた人が用いる発音である。イギリスでは学歴や職業によって話す英語が違うことで知られているが、この RP は地域なまりを持つ人たちの感情を刺激することが最も少ない発音であるという理由から、BBC(英国放送協会)のアナウンサーによって話される英語で知られている。また、英国王室、英国国教会、議会そして法曹界において用いられる。

しかし、実際には人口の約３％にも満たない人々しか話さない英語である。具体的には、bird や teacher の[r]が階級が高い人ほど発音されず、それとは反対に階級の低い人ほど発音される。また、[ｈ]音も階級の低い人ほど発音しない特徴がある。

３．２．コックニーの英語

コックニー(Cockney)は cock’s egg(雄鶏の卵)に由来する「意気地無し，あまえっこ」という意味があり、ロンドンの下町イーストエンドの一角チープサイド(Cheapside)にあるボウ教会(St. Mary-le-Bow)の鐘の音が聞こえる地域に育った人々が用いる英語を言う。実際にはこのイーストエンド地区に住む労働者階級の人々が話す英語である。このコックニーの英語を矯正する映画でよく知られるバーナード・ショウの戯曲「ピグマリオン」が原作とされる「マイフェアー・レディー」では、青物市場の花売り娘イライザのひどいコックニーなまりを聞いた言語学者のヒギンズ教授が彼女のコックニーを見事矯正したことで知られる。ヒギンズ教授が矯正のため用いた英文が下記（１）と（２）の例で、コックニーの音声の特徴をよく示している。これらコックニーの特徴は下記の（１）～（４）に分類される。

（１）母音[ei]が[ai]に変化　name, take, wait, face, price など

The rain in Spain stays mainly in the plain.（スペインの雨は主にスペインの平野に降る。「マイフェアー・レディー」より）

（２）子音[h]の脱落 hit, have, hear,など

In Hertford, Hereford and Hampshire hurricanes hardly ever happen.（ハートフォード、ヘルホード、ハンプシャーでは台風はほとんど来ない。「マイフェアー・レディー」より）

（３）子音[l]が子音の前や語末で母音化あるいは半母音化

milk, middle, able など

（４）子音[θ],[ð]が[f],[v]に変化

(有声音)this, father, (無声音)think, three など

４．アメリカ英語

４．１．アメリカ英語の起源

イギリスからアメリカ大陸に移った最初の移民は 1607 年にヴァージニア州ジェームズタウン周辺に約 100 人で植民地を建設した。歴史的には、1620 年にメイフラワー号でイングランドのプリマスから、マサチューセッツ州プリマスに 11 月 21 日に到着して、植民地を建設したピューリタン(新教徒)の一団が有名である。この一行は総勢約 100 名であったが、この中には宗教上の迫害を逃れてやって来た 35 名のピューリタンが中心になった。その後、移民はこの北東部からしだいに中部に拡大して、1682 年にウイリアム・ペンをはじめとするクエーカー教徒の一団によって、アメリカ中部大西洋沿岸地方にも植民が始まった。当初の移民はニューイングランドと呼ばれる北東部沿岸地域に集中していたが、後にこの地域は独立当初の 13 州になったところで、北東のメイン州から南西のジョージア州まで細長くのびている。このニューイングランドの由来は南部の開拓者として知られるスミス隊長が 1614 年にヴァージニア以北の土地を探検して名付けたものである。

当時アメリカに渡った植民者たちはシェークスピア（1564-1616）が話していた 17 世紀のイギリス英語を用いていた。新大陸にやって来た人々はこれまで本国で見たこともないものに、ネイティブ・アメリカンが用いていたことばを借用するなどして、アメリカ英語の語彙を増やしていった。アメリカ英語の方言は移民が入植した地域とその後の移動に関係するところが大きい。マサチューセッツ湾周辺の東部(Eastern)、ペンシルヴァニア州から西部の太平洋岸に至る広大な中西部(Middle Western)、そしてヴァージニア州からテキサス州東部に至る南部(Southern)の３つの方言に分けられる。この中で、最も広大な地域で用いられている中西部のアメリカ英語が一般アメリカ英語(General American)、すなわち GA と呼ばれている。移民はこの北東部からしだいに南部そして中西部に拡大して行った。アメリカ英語は国土面積が広大な割には、方言における地域差や社会的差異はイギリス英語と比べて大きくない。

４．２．アメリカ英語と辞書

ピカリング(John Pickering)が 1816 年にアメリカ英語の最初の辞書として語彙集を出版した。竹林滋他（1993:103）によると、ピカリングはアメリカの言葉がイギリスの標準から離れることを堕落ととらえ、その浄化のために問題とすべきアメリカ語法を摘出したと述べている。このことから、当時はまだ、アメリカ英語は確立されておらず、イギリス英語のいわば一方言と考えられていた。

アメリカがイギリスから独立した頃はまだ違いがなかったが、アメリカ独立戦争の指導者フランクリンがイギリス英語のつづりをきらい、アメリカ英語のつづりを提案したとされる。彼のアイディアがウェブスター(Noah Webster)に影響を与えることになり、愛国的な立場からアメリカ人はアメリカ英語を学ぶべきだと考え、つづり、発音、そして文法などをまとめた *A Grammatical Institute of the English Language* を出版した。さらに彼は当時のアメリカでは地域によって、発音やつづりが異なるため、アメリカ全体で統一する必要を感じて、つづりの改良を行ない、1828 年に *An American Dictionary of the English Language* を出版した。具体的には、イギリスでは colour, honour, traveller とつづられるものが、それぞれ color, honor, traveler となり、現在のアメリカ式つづりが確立された。ウェブスターは、その後のアメリカにおけるつづり字法や辞書編集に大きな影響を与えた。彼の改革は新奇をてらったものではなく、可能な限り語源に正しく、類推し易いつづり字を意図したものであった。

４．３．アメリカの英語公用語化

英語はアメリカの公用語ではないが、現在アメリカ英語が事実上世界の共通語になっている。1980年代に公用語化論争が起きたが、この公用語化論争はノア・ウェブスターにまで遡ることができる。彼は当時英語をアメリカの国語にすることを主張した。また、19世紀末には大量の移民が流入し、彼らの言語や文化の影響を危惧して、ルーズベルト大統領(Theodore Roosevelt)は移民の国アメリカを束ねるのは ‘one flag, one language’であると述べた。この後、1963年、アメリカの公立学校で初めて、二カ国語教育プログラムを実施したのはデイド・カウンティであった。スペイン語が実質上、第二公用語に位置づけられ、二つの言語と二つの文化が共存し発展してきた。

４．４．アメリカ英語の特徴

イギリス英語とアメリカ英語の顕著な違いは発音に見られる。RP と呼ばれる標準のイギリス発音では、card や lord の母音の後の[r]は発音されないが、広大な中西部地域のＧＡ(一般アメリカ英語)ではこの[r]を発音するのが普通である。この母音の後の[r]の脱落は、17世紀にイングランド南東部において生じたが、これとは反対に GA において、[r]を保った発音がアメリカ全土に広まった。

発音の違いは特に母音に見られる。イギリス英語の[ɑː]が[æ]になる例と、同様に[ɔ]がアメリカ英語では[ɑ]になる例が見られる。

（１）イギリス英語の[ɑː]がアメリカ英語では[æ]になる

ask, fast, after, pass, laugh など

（２）イギリス英語の[ɔ]がアメリカ英語では[ɑ]になる

hot, god, college, doll, not など

つづりはアメリカ英語はイギリス英語に比べて、出来るだけ発音通りに表記するが、下記（４）のアクセントのない語尾や（５）の余分な文字を省くことが特徴である。また、下記の（１）のように発音につづりが近い傾向が強い。

（１）語尾-re から-er

（英）centre, fibre, metre　（米）center, fiber, meter

（２）　語尾-our から-or

（英）colour, honour, labour　（米）color, honor, labor

（３）　二重子音字から単独子音字

（英）waggon, traveller, faggot　（米）wagon, traveler, fagot

（４）　アクセントのない語尾を省略

（英）catalogue, envelope, toilette（米）catalog, envelop, toilet

（５）余分な e を省略

（英）axe, annexe, asphalte,　（米）ax, annex, asphalt

（６）　s から z

（英）recognise, industrialisation　（米）recognize, industrialization

（７）　x から ct

（英）connexion, inflexion　（米）connection, inflection

語彙におけるアメリカ英語とイギリス英語の違いは興味深い点が多く見られる。特徴的なものには、（１）同一の語で異なった意味を表す。（２）それぞれ異なった語を用いる。（３）交通・輸送を表す語で、異なった語を用いる。これらの中で、（４）の交通・輸送を表す語がアメリカ英語とイギリス英語の差異を最も際立てている点である。

（１）同一語でそれぞれ異なった意味を表す

corn	（英）小麦	（米）とうもろこし
pants	（英）パンツ	（米）ズボン
dresser	（英）食器棚	（米）化粧台
pavement	（英）舗装道路	（米）歩道

（２）同一の意味を表すのにそれぞれ異なった語を用いる

（英）apartment（米）flat　（英）cinema　(米)　movie

（英）graduate （米）alumnus （英）petrol （米）gas
（英）lift （米）elevator （英）luggage （米）baggage

（３）運輸・交通を表す語で、異なった語を用いる

（英）underground（米）subway （英）railroad （米）railway
（英）truck （米）lorry （英）hood （米）bonnet
（英）airways （米）airlines （英）motorway （米）expressway

（４）イギリスでは既に使われなくなった過去分詞がアメリカではまだ使用されたり、両方の過去分詞が併用されたりする。

（英）get, got, got （米）get, got, gotten
（英）prove, proved, proved （米）prove, proved, proved
（英）strike, struck, struck （米）strike, struck, stricken
（英）smell, smelt, smelt （米）smell, smelled, smelled

（５）イギリス英語では助動詞として使われる should がアメリカ英語では省略されるが、have, need, ought などは本動詞として使用する。

（英）I demanded that he should apologise. （英では-ise）
（米）I demanded that he apologize.
（英）He hasn’t any sisters.
（米）He doesn’t have any sisters.
（英）You needn’t help him.
（米）You don’t need to help him.

４．５．アメリカ英語の借用語

アメリカ英語とイギリス英語の違いは文法の面ではそれほど違いは大きくないものの、発音と語彙の面では大きく異なっており、特に様々な言語からの借用語が豊富である。

（インディオの言語から）moose, raccoon, hickory, sequoia, tomahawk
（スペイン語から） cafeteria, canyon, mosquito, mustang, plaza
（アフリカの言語から） banjo, jazz, jumbo, okra, zombie
（オランダ語から） cookie, waffle, sleigh, boss, patron
（ドイツ語から） noodle, hamburger, frankfurter, delicatessen

４．６．黒人英語

安く安定した労働力として、黒人は三角貿易と呼ばれる奴隷貿易によって、数多くの黒人がアフリカから運ばれてきた。アフリカで安い工業製品と交換され、奴隷船で新大陸に運ばれ、現地の原材料を安く入手して持ち帰るのが三角貿易であった。19 世紀末まではアメリカの黒人の 90%が南部に居住していたが、20 世紀には北部、中部、西部に移住して行った。

黒人英語の特徴はまず母音に見られ、mine や toy の母音[ai]と[ɔi]がそれぞれ[aː]と[ɔː]と発音される。また鼻音の前では[ɪ]と[ɜ]の区別がなくなり、pin と pen は同じ発音になる。次に動詞の時制について、石黒編(1992:63)によると、主語の人称にかかわらず、be 動詞は現在形には is が用いられ、過去形には was が用いられる。もう一方で、規則変化の動詞の場合には、現在形および過去形は原形と同じになり、不規則変化動詞の過去形は、通常過去分詞形が用いられる。

（１）現在形

He live in Detroit now. (=He lives in Detroit now.)

Is they sick? (=Are they sick?) （石黒：1992:63）

（２）過去形

He live in Detroit last year. (=He lived in Detroit last year.)

I drunk too much yesterday. (=I drank too much yesterday)

They was acting up and going on. (=They were acting up and going on.) (*ibid.*)

４．７．イギリス英語のアメリカ英語化

イギリス英語においても、アメリカ英語の影響を色濃く受けて表現される下記(1)のlike、および(2)のhaveの疑問文にdoを用いる例が見られる。これらの例からもイギリスにおいて、アメリカ英語の影響が及んでいることを示している。

(1) I feel like I'm getting a cold. (Older British form: I feel as if I'm getting a cold.) Swan 295

(2) Do you have today's newspaper? (Older British form: Have you (got) today's newspaper?) (*ibid.*)

５．その他の地域の英語

５．１．カナダの英語

カナダ英語は 18 世紀後半のイギリス、アイルランド、スコットランドで話されていたものが 19 世紀初頭に移住した人々によってもたらされた。アメリカ独立戦争当時、アメリカ

にはカナダの独立を推進する愛国派と、イギリスに忠誠を誓う王党派がいたが、愛国派から身を守るため、約４万人もの王党派が現在のオンタリオ州に定住した。この王党派が話す英語が標準カナダ英語(General Canadian)になった。

カナダ英語の特徴は石黒編(1992:76-77) によると、room や roof の母音が RP では[uː]と長母音で発音されるのに対して、[u]と短母音になる。また、house や shout の二重母音の[au]が[əu]になり、同様に life や type の二重母音の[ai]は[əi]と発音される。次にカナダに移住した人々は自分たちの知らないものに、現地固有の名を付けた。例えば、McIntosh(りんごの一種), crocus(アネモネ), insulin(インシュリン), ski-doo(雪上スクーター), lacrosse(ラクロス)などの例がある。しかし、統語上のカナダ英語の顕著な英米語との差異は下記の間投詞 eh の例の他はほとんど見られない。

Look at that, eh?

Call me John, eh?

５．２．オーストラリア英語

オーストラリアの国名はラテン語の terra australis incognita(未知の南方大陸)に由来する。1770 年ジェームズ・クック(Captain James Cook)による、シドニーのボタニー湾上陸に始まる。その後、ロンドンの刑務所が過密状態になり、収容し切れなくなった軽犯罪者のための流刑地として、1778 年から 1840 年まで強制移民が続いた。

オーストラリア英語には、Cultivated(教養のある), General(標準の), そして Broad(なまりの強い)オーストラリア英語という３つの社会方言がある。発音はイギリス英語の RP や、特にコックニーの影響を受けており、つづりや文法はイギリス英語が用いられている。

（１）二重母音の[ei]は[ai]と発音される。 take, eight, mate, today

（２）ＲＰと同じように、語末のｒや語中の子音の前のｒは発音しない。 art, teacher

（３）語頭のｈが脱落することがある。 hat, habit

語彙には（５）のオーストラリア現住民のアボリジニーの言語からの借入による場合と、（６）の既存の語彙の拡張的な使用の場合が見られる。

（５）boomerang(ブーメラン), koala(コアラ), kangaroo(カンガルー), dingo(ディンゴ), wallaby(ワラビー), wombat(ウォンバット)

（６）outback(未開拓の奥地), backblocks(奥地), swagman(浮浪者), stockman(牧童), spinney(藪)

５．３．ニュージーランド英語

ニュージーランドの国名はオランダの地方名 Nieuw Zeeland(New Zealand)に由来する。ジェームズ・クックがオーストラリアにやって来る１年前の 1769 年にニュージーランドに上陸した。ニュージーランドはオーストラリアと異なり、当初から自由入植者が作りあげた植民地であったため、オーストラリアに見られるような顕著な社会的方言はないものの、語彙において、オーストラリア英語と意味が同じものが多いが異なるものも見られる。また、ニュージーランドの英語の語彙にはマオリ語からの借用語が多く見られるのが特徴である。hongi（鼻を互いに押し付けあう挨拶）、 iwi（人々、部族）、marae（集会場）、 mauri（命、生きる力）、waka（カヌー）、whare（家）

５．４．南アフリカの英語

18 世紀以降、オランダ、フランス、イギリスの領土をめぐる争奪の後、1910 年にイギリスはオランダの植民地をも併合して南アフリカが誕生した。南アフリカの英語はイギリス英語とほとんど変わりはないが、発音には興味深い例が見られる。八木克正（2007）によると、発音における最も顕著な特徴は kit, foot, lot などの短母音と fleece, goose, thought の長母音の区別がなく、すべて短母音化される。

６．おわりに

ブリテン島の小さな島国イギリスで 17 世紀に植民地支配が始まり、19 世紀後半まで世界の覇権を握る大英帝国を打ち立てた。この時期、世界に英語圏が拡大するとともに、英語の変種を数多く誕生させた。英語はヨーロッパの言語からだけではなく、大英帝国の植民地を始め、多くの言語から借用語を増大させた。この拡大によって、今日のイギリス英語とアメリカ英語、そしてオーストラリア英語がそれぞれ異なる要因になった。また、英語がグローバルな言語として拡大を続ける一方で、少数民族が用いるいわゆる危機言語が地上より消滅することが懸念される。

本稿では、イギリス英語に端を発して、イギリス英語とアメリカ英語の違いから、さらに南半球に拡大した英語とその変種について、その都度、言語事実を示し説明を加えた。

英語は現在、上記以外の国や地域では、ESL（第二言語としての英語：English as a Second Language）、および EFL（外国語としての英語：English as a Foreign Language）として用いられ、現地の言語の影響を受けながら、英語には今後さらなる変容が予想される。

参考文献

Crystal, David (1998) *English As A Global Language,* Cambridge University Press.

Crystal, David (2004) *Language Revolution,* Cambridge University Press.

David, Graddol (1997) *The Future of English?* 山岸勝榮訳（1999）『英語の未来』研究社.

石黒昭博編（1992）『世界の英語小事典』研究社出版.

鈴木雅光(2009)「危機言語」*dialogos* 東洋大学文学部紀要第 62 集 英語コミュニケーション学科篇第 9 号.

Swan, Michael (2005) *Practical English Usage (3rd Edition)*, Oxford University Press.

竹林滋・東信行・高橋潔・高橋作太郎（1988）『アメリカ英語概説』大修館書店.

竹下裕子・石川卓編（2004）『世界は英語をどう使っているか＜日本人の英語＞を考えるために』新曜社.

若田部博哉（1985）『英語学体系 10-2 英語史ⅢB(米語史)』大修館書店.

八木克正（2007）『新英語学概論』英宝社.

八田洋子（2001）「世界における英語の位置」『文学部紀要』文教大学文学部第 14―２号.